独裁から降りるにはボイコットと自治かな

味噌づくりや草木染め等の手仕事から核のない世界に想いを馳せる

次号から連載エッセイを執筆してもらう

冨田貴史さん

11年前にも大阪のロータスルーツでインタビューしたことがある冨田貴史さん。そのころは「六ヶ所村ラプソディー」の上映など年間260本もの草の根イベントを開いていた。それから一巡りほどした今年の一月、坂田昌子さんの生物多様性の集まりに参加したところ、彼が司会役をやっていたので再会した。それから何度か話してるうち、次号から連載エッセイを頼むことにした。久しぶりの新人登場だ。そこでまずは彼の紹介となるように、以前のインタビュー以降の話、最近の活動内容、そして今のコロナの状況をどう見てるかなどなどを聞かせてもらった。お話しを聞くため、大阪キタの中津商店街にある冨貴工房を訪ねた。ここは草木染めや味噌づくりなどの手仕事を主にする工房で、彼のプライベートスタジオだという。話題は広範囲に及び、今後の連載エッセイが楽しみな展開となった。（あ）

――11年ぶりのインタビューですが、その時の号を見直してたら、年間260本の上映会やワークショップなどの草の根イベントをやってると書いてました。

冨田●2006年に「六ヶ所村ラプソディー」ていう映画ができたじゃないですか。2006年の3月31日に六ヶ所村再処理工場のアクティブ試験が行われたんです。「試験」て言ってるけど、実際に燃料棒を切って放射能が空気中に出る。その時ぼくは署名集めとかけっこうやってて、若いからかもしれないけど、本気で止まると思ってたんです。そこまでやっちゃったら取り返しがつかないじゃんていうのを僕なりに知ってたから。まさか今やらないだろ、こんなに反対の声もあるのにと思ってた。なので、3月31日、めちゃめちゃ落ち込んだんです。忘れもしない！

で、こんなに落ち込んでるっていうのは俺はまだやりきれてないんだと、ほんとに止めるために本気出してたら、落ち込むけどこういう気持ちじゃないだろうなと。なんか認識が甘かったなと思った。やってる感、やってる風だった。

それまで音楽の専門学校で講師をして、それで生活しながら活動してたんですが、自分が思ってることをしっかり自分の言葉で伝えようと思って、それから本を書き始めたり、自分が伝えたいと思ってる活動にもっとコミットしだした。そしたらちょうど「六ヶ所村ラプソディー」が2006年に出来たので6月に監督に会いに行ってみたら、困ってたんです。広まらないと。マスメディアが全然取り上げてくれない。で、できたら手を貸して欲しいと言ってないけど言ってるような感じを受けて、つまりこれはほんとに求められてると思ったので、じゃあ俺協力します、予告編のDVDとかはないですかと聞いて、トレーラーのDVDを借りてあちこちで上映するようになったんです。

岡野弘樹さんがやってる祭りとか、2年目の山水人とか。こういう映画があるんだということを広める活動をしたんです。祭りに来てる人たちは影響力あるだろう、一緒にこのことを考えてくれるだろうと勝手に思って。富山での虹の祭りにも行ったり。そのうちいろんな縁が出来てきて、上映したいという話しが出てくるけど、小規模でやりたい人にとっては上映権料を正規の値段で払うには200人とか集めないといけないので大変だし、僕はライブみたいに20人、30人の場の力みたいなのも感じてたので、それくらいでできないか鎌仲さんや配給会社と交渉したんです。一番のネックはクォリティコントロールというか、ちゃんと明るく映写するとか音がしっかり聞き取れる環境を作れるならいいですよという話になったので、じゃあ僕がいちいち会場に行ってそれをやるのでやらせてほしいっていう話をして、関西で何カ所か、九州で何カ所か、沖縄でってやってるうちに、ウワサがウワサを呼び、けっきょく全国120カ所で上映やったんです。

そのうち映画を見るだけじゃなくて、いろんなことを一緒に分かち合える場をワークショップとしてやりたいという相談を受けるようになった。もともと僕はワークショップを実現するための授業を音楽系の専門学校でやってたんです。だからそれこそ全国で思いは持ってるけどイベントの主催をしたことのない人達のカウンセリングをしながらイベントやワークショップをたちあげて、そこに僕が呼ばれるわけだから本数が増えたんだと思います。けっきょく260本やるなかで、徹底的に取りこぼさなかった。なんなら参加費もタイムテーブルも一緒に考えて決める。告知文も僕が書いてたりすることもあったし。

全てのことに対して当事者性を持って一緒に考えるというのがほんとの地域起こしだなーと思ったから、とにかく主催したい人たちと話して、いろいろ調整してやってるうちに、なんかイベントが増え続けてるぞみたいになって（笑）、数えてみたら、2007～2009年くらいが年間260本。で、2010年に300本になったんです。これはもう頭打ちだと。これ以上増えないだろうと思ってたら2011年に原発事故が起きて、今までそんなこ

と言ってなかった人達が、原発のことに詳しいたかさん来て説明してほしいと。で、2011 年、2012 年は年間 360 本になったんです。１日２本やったこともあります。これはもうどうなっちゃうんだろうなーと思ってました。

各地の主催者って、自給自足してたり手仕事してる人も多くて、決定的だったのは祝島ですね。動き回ってるってことは要するに自給自足してないわけだから、根っこのない自分が祝島のサポートとか言ってるのはバランスがおかしいなと思ったんです。原発事故の時に思ったのは、いざというときに何かを送るとか供給するのは、日々自分が蓄積しているものがあって始めてそれを渡せる。僕は特に味噌っていうものが放射能対策になるのは常々知ってたので、少なくとも体質が改善されて免疫力が上がるわけだから、いざ送りたいというときに、そこからやりなおさなきゃなーと。そしたらひょんな流れで冨貴工房を立ち上げる流れになって、イベントの本数もガクッと減ったんです。

手仕事の作業所、冨貴工房

この場所はもともとカフェだったんですが、けっきょく僕がカフェではなく工房として継ぐことになったんです。

「全国に作業所が増えるといいですね」とか僕は言ってたんですが、各地でワークショップを開いて手仕事をみんなとやってたんです。褌を縫うとか、草木染めするとか、鉄火味噌をつくったり。で、その褌ができたのを見た時に、なんだ、地域の作業所ってこれじゃん！と思ったんですよ。つまり新しく建物を借りて、備品をそろえて、スタッフを雇ってみたいなかんじでなくても、交替交替で、私は週一でやるね、私も週一でとなったら週に二回になっちゃうじゃないですか。週に二回手仕事をやってる場所ってもう作業所じゃないですか。じゃあここで作業所やります！ってなったのが、2011 年の冬かな。それで元々やりたいと思ってた味噌づくりと草木染め、特に衣服と食べものそれぞれの中で一番根本だと思うものをやろうっていうのが始まりなんです。食べものでいえば、もちろん米っていうのはあるけど、米と味噌だと思うから、あと塩なんですけど、塩炊きっていうのも毎年必ずやってて、「冨貴工房みそ部」がたちあがってからは、そこの仲間達と毎年旧暦の年越しに塩を炊いて、糀を付けて、自分たちで育てた大豆で味噌をつくるという合宿をしてるんです。

いざとなったときの人間としての生命力は、まず何が大事かわかることと、大事なモノにアクセスする方法をもってることだと思ってて、味噌づくりと、味噌をつくれる場づくりていうのかな。やっぱり場がないとつくれないから、それでこういう場所を持ったり、またはいろんな場所で、野外でもどこでも、石を組んで薪を割れば味噌つくれるぞっていう実体験を持つことも大事だと思ってるから、そういう経験を積むようにしてます。そして、衣服の中で一ヶしか持てないとなったら僕は褌なんです。だから自分で褌をつくる。サイズも自分ではかり、自分で布を仕入れ、それを薬効のあるもので染める。褌と味噌、それに付随して梅干しとか鉄火味噌になったり、今は足元の足袋をつくったりしてます。

生物多様性条約会議への関わり

── 坂田昌子さんと COP（生物多様性条約）の国際会議に行ってる写真を見ましたが、COP の会議にはしょっちゅう行ってるんですか？

●きっかけは上関原発で、2008 年くらいに生物多様性条約の存在を知って、その締約国会議 COP があるのを知り、2010 年の愛知・名古屋での COP10 に行ったのが最初です。でもその時は、外でブース出したりアピールみたいなのをしたり、上関のことで記者会見をみんなで企画したり。こんな会議をやってるのに、中国電力が埋め立てを進めようとしてるみたいな。それが最初で、それから「いきものカフェ」という生物多様性についての小さな茶話会を名古屋と大阪と東京で立ち上げたんです。それをずっとやりながら、COP は２年に１回あるから、それに向けて自分たちのメッセージを伝えるとか、会議で決まったことをみんなに知らせるという、いわゆるハブみたいなことを始めたんです。で、「いきものカフェ」は僕が進行役で坂田さんが情報を伝える人みたいなかんじで連携が始まって、ずっとやってきてるんですけど、2012 年の COP 会議はインドかな、それには行かなかった。

というのは海旅キャンプというのを始めたんです。疎開・保養キャンプを。それはすーごいエネルギーを使うというか、精神的エネルギーを特に使うものだったから、2012 年以降は、完全なるボランティアみたいな、やればやるほど生活が苦しくなる（笑）やつを２ヶとかはできないっていうのがあって、国際会議って完全手弁当だから、何十万とかへたしたら百万とかかかるから、それでインドは見送り、2104 年の韓国の会議には行くつもりだったんですけど、海旅キャンプの方がたいへんで行けず。2016 年のメキシコの COP13 に行ったんです。そこで初めて中に入って NGO のミーティングに参加したり、プレスとかにも働きかけて記者会見開いて、福島原発事故の汚染状況とかを伝えたりしたんです。そのあと、もうこれは通わなきゃいけないなーと思ったし、僕たちもたいへんだけど、市民団体を国際的にとりまとめてる人達が何よりたいへんそうだったんです。俺たちがここで力を発揮できるようになるには何したらいいんだろうねていうのを、国際的な市民のとりまとめをしているガディールっていう同世代くらいの若者に聞いたら、とりあえず準備会合から来ることだねと。この COP は大きいけど、ここでは結果はほぼ出ている状況だから、議題を決めるとかそういうところから関わっていくことだと思うって言われて、そっか、

↑味噌作りワークショップ

その通りだ！でもマジで？と思ったんです。

で翌年の 2017 年に国連本部のあるモントリオールでの準備会合に行ったんです。日本人が国際会議に関わる一番のバリアは言語で、意識の中でも苦手となってる人は多いし、実際に超早口の国際会議の英語なんてほんと無理で。これは翻訳、通訳出来る仲間を横でつないで、僕らが現場で仕入れてきた様々なドキュメントを協力して訳すようなことが必要だなと思ってたら、僕のパートナーのえりが通訳も翻訳もプロでやってたから、それで一緒に行ったんです。行くって決めたあと妊娠がわかって、もう精神的にもつわりの状態でモントリオールにいるようなかんじで、俺は坂田さんとえりのケアをしつづけてました。（笑）

それで、子どもも出来たし、今は一回休もうと。どっちにしろこれは長期的な取り組みになるぞってことで、今は坂田さんの話を CD にしたりして、坂田さんが理解してることを理解してる人が増えるっていうのは、単純に国際会議に関わっていくチームづくりの上でも重要だと思ってます。僕が国際会議に実際に参加した中で何が必要かと見えたのは、翻訳チームをつくること、通訳チームをつくること、そして会議のロジックというのか、どういうふうに交渉してて、どういう人達が関わってるのかというのを理解すること、そしてもっと根本では、なんで生物多様性が大事なのっていうところとか、今はそれに注力してます。どっちにしてもコロナのことで国際会議のスケジュール自体がぐちゃぐちゃになってるので、様子を見ながら今後の関わり方を見てるというところです。でもこれはほんとに一生ものだと思ってるのは間違いないです。

核のない世界をつくる

COP になんで関わってるかということを言っておくと、生物多様性の国際会議で放射能の話が出てこなさすぎる！　気候変動の COP なんかはひどいですね。温暖化のために原発はいいみたいな話がむしろ強かったりする。生物多様性でいえば海洋汚染の話とか化学物質を海洋に流すことを規制するロンドン条約とかあるのに、放射能っていうのは抜けてるんですよ。いたるところで抜けてる。だから条約に入れて行くとか、なんかしらのルールづくりとか目標づくりをしていくところに放射能は入れたいし、「生物多様性と人権」というところでも、人権侵害にあたるとあきらかに思われるような方法で原発の建設地が決まっていたりということもあるし、それが条約をつくるとかルール設定というところまでいかなくても、その動きをしていくことに意味がある。

６ｐにつづく

↑茜染めのワークショップ

たとえばいま台湾でもモンゴルでも最終処分場の計画があるし、ボリビアでもトリウムを使った原発の計画がある。なのになんでボリビアの話が入ってこないかっていうと、経済圏が違うからなんです。グローバリズムと言うけど、やっぱりアメリカ、イギリス、フランスが主流で、でもボリビアはどっちかというとロシアから圧力かかってたりとか、BRICS という経済圏の圧力の中で動いてたりするので、お互いのことを知らないんですよ。それってもったいないというか、被ばくに関する情報とかをボリビアの人が一生懸命探すより、僕らが見つけてきてぱっと渡したら早いじゃないですか。核と原発と放射能と被ばくについては世界で１番目か２番目か３番目に日本は情報量が多いと思うんです。市民運動をつくっていくとなったときに、日本人はあらゆる立場をもってる。加害者でもあるし被害者でもあるし、サバイバーでもあるし被ばくもしてるし、原発を止めたし作られたし、再処理から高速増殖炉からなんでも持ってるし。英語と日本語の壁を壊したいこだわりの１つはそれで、日本の中に眠ってるいい実践例とか悲しい歴史とか、活動家たちの努力とか、そこから生まれたデータとか情報を、ボリビアとかインドとか、インドネシアや台湾で活動してる仲間にシェアしたいなと。NO NUKES NETWORK みたいなものを。

僕なんかはもう若手とか言ってられない年になってるし、いつまでも先輩方がやってきたネットワークをただ眺めてるっていうよりは、もう一回立ち上げていく時だと思ってるんです。それも、よーし立ち上げたぞーって宣言するんじゃなくて、実態として現場で一人一人と繋がっていくということをしたくて。

僕が国際会議に行っている理由はそれです。明確に、核のない世界を作るため。そのために、国際会議でどこまでできるかはわからないけど、僕はやれることがあると踏んでいるから関わってるんです。

まずは構造づくりで、たとえばドイツなんかでは若者たちがもっと国際会議に行った方がいいということで、自分たちでグループをつくるんです。で、みんなでお金を集めて、話し合って代表者を送り込むんですよ。そういうことも含めて、僕たちはもっとやれることがある。

ＣＤの売り上げをちょっとづつプールするっていうのもその一つだし、「私はできることがない」っていうよりは、「私はカンパっていう活動の関わり方がある」と思って欲しいし、日本の中でもっとカジュアルに風通し良くやれるんだろうなと思う。大学卒業して、国際協力とか生物多様性に興味あるけど、通訳や翻訳も手伝えるけどみたいな子を、よし行ってこい！とみんなで送り出したいなと、そういうイメージです。

保養活動＝海旅キャンプ

もともと保養活動というものは知ってたんです。特にベラルーシ、ウクライナの子ども達が日本に来てて。転地療法と言ってたかな。で、今 保養を一緒にやってる友人が 2011 年にガイガーカウンターを持って福島県内のけっこう近いところまで行ったら、すごい線量があがって、ほんとにこれはやばいんだということがわかった。そのあとに福島に住んでる方から、なかなか放射能が怖いとか気をつけたいと言えない空気があると。見張られてるかんじもあるくらいで、嫌がらせやバッシングもあると。

そういうことも気兼ね無く話せるし、ゆっくりできるし緊張感持たずに過ごせる場をつくりたいねと話してて、それで 2012 年の８月から始まったんです。そこから毎年、岐阜の山の中に来てもらってます。

海旅キャンプという名前なのに山の中でやってるのは、さっき言った友人が海旅団という名前で石巻でボランティア登録してて、たぶん海賊団と書こうとしたんだけど、賊を家族の族と書こうとして間違えて旅になって、海旅団がやってるから海旅キャンプと。

ほんとに誰も来ないような山奥で、小っちゃな子どもでも遊べる川があって、貸し切り状態で、民宿と山小屋でみんなで寝泊まりして、ご飯は家族もまざってつくって、一緒にご飯を囲んで、だいたいは川で遊んでるという。たまに花火に連れてったりするくらいで、ずっと続いてます。８回はやったかな。ただ今年はコロナのことで止めました。

保養に対する国の態度は国によってぜんぜん違うんです。ベラルーシ、ウクライナは国が予算を出してるくらいですが、日本は、厚労省はどうやら保養という言葉を使って欲しくない。保養は必要ないということにしたいらしい。国の態度がぜんぜん違うんです。具体的に言われたこともあるんですが、「保養なんて意味がない」とか、保養に行くことで「逃げるのか」と言われた人もいる。保養活動に対してハラスメントを受けたりもしてるんですよ。だから僕らのキャンプはまだゆるくて、写真 OK になってるけど、参加してる人を写真には写さないでほしいという保養は多いし、だからすごい広まりにくいし、なおかつ手弁当だからカンパが必要という、だからこれも自分にとって一生続けるものです。

やってるうちに食事はだいぶ変わりました。味噌をつくるのが恒例になったのも３年目からです。毎年味噌をつくって、それはペイフォワードになってて、翌年の海旅キャンプに来た人が食べる味噌をみんなでつくるという。子どももだんだんそれを理解してます。その味噌で毎日何十人分とどっさりみそ汁を作っても足りる。保養キャンプに来た人達が作る味噌でキャンプのみそ汁が自給できてる状況ができてて、続けて行くと少しづつやれることが増えくるし、理解も増えてくる。

なんで一生と言ってるかというと、チェルノブイリで原発事故があって、26 年目にウクライナに保養庁という公共機関ができたんですよ。国家予算で国営の保養所があって、そこに放射能汚染地帯の子ども達が３週間とか滞在して、食事治療とかマッサージとか針灸とか受けれるんです。26 年目にして、このことはまだまだまだ大事だから、国として統一した機関をつくろうとなった。てことは、2011 年の 26 年後の 2037 年にもしそういうのが立ち上がってなかったら、それはもう自分のせいだなと思うんですよ。だって国家機関の中の人であれ外の人であれ、いろんな人が働きかけて、誰かが想いをもって形にしようと思わなかったら形にならないですよね。どんなものも、待ってててきるものではない。僕はけっきょく民間の毛細血管のような助け合いが大事だと思うし、国がやればいい！って言ってるんじゃなくて、担い手は一人一人想いがある人だと思う。今のような、保養なんて必要ねえとか保養に行こうとすると差別される空気をまず変えること、そこからさらに、地域や立場を超えて、子ども達を放射能から社会をあげて守っていく空気を作っていくってことは、そうなったらいいなーと思う人が関わっていってこそ叶うものだと僕は思うから、そういう意味でこれは時間もかかるから一生もんだなと思ってるんです。

僕が思うに、ウラン鉱山がぜんぶ閉まるまで確実に保養は必要だし、あらゆる核施設、放射性物質を持ってる場所において、必ずそこに人の暮らしがある。土の中にある限りはウランはウランでいるけど、僕らがちょっかいを出した以上は人間が管理することは避けられない。となったら、そこにいる人を孤立させるのは不自然で違和感があるので、そこの人達の身体と気持ちを考えると、みんなでやっていくことにするのが、僕らの社会の成長という意味でも、一つのフラッグ、向かうところかなと思ってます。

キャンプでの味噌づくり

保養キャンプで味噌づくりをするのは、味噌が免疫力をあげるということから始まりました。子ども達が自分の身体のためになることを自分たちでやるという経験ってなかなかないじゃないですか。大人と子どもが一緒になって共同作業する場所もないし、それは理屈ですけど、何よりやったら楽しそうだったんです。それですごく打ち

解けるし、子どもも毎年楽しみにしてて、「タカさん、今年はいつやるの？」みたいな。

放射能対策になるというのをもう少し拡げると、原発事故や核の被害の現場に必ずといっていいほど横たわってるのは孤立なんです。家族の孤立、コミュニティの孤立。それをつなぐものは共同作業なので、共同作業の場であることもすてき。自分の命や家族の命や未来の命に貢献する体験を持つことが、その人間の精神を養うから、そういう意味でも味噌ってペイフォワードになる。半年以上後の命のために今なにかやってるということだから。見返りを求めた活動とちょっと違う次元の意識が生まれる。

かみ砕くと、放射能を浴びてようが浴びてなかろうが、みそ汁を飲むことによって栄養を十分にとれたり、血液がきれいになったり、腸が整ったり、1000 年以上の間、日本列島という土地に暮らす人達が大事だと思っていたものをスルーするか、とりあえず自分も続けてみようとするかっていったら、とりあえず続けてみるじゃね？と思ってて、一汁一菜文化というか、雑穀と大豆由来の発酵食品をみそ汁っていう形で採り、そこに季節の野菜とか、魚が捕れたら魚を食べ、獣が捕まったら獣を食べるとか。そのベースは味噌と穀類だったんじゃないかなーと思ってます。

→旧暦年越しみそづくり合宿三日目（焼き塩づくりの様子）

そういう原点回帰であり、歴史と繋がるというか昔ながらの生き方に体感をもって繋がるというので味噌を大事にしてます。

ネオ・ネイティブ・ジャパニーズ

── いま異常気象がふつうになってきて、季節が昔とは変わってしまってるような気がします。暦というものをずっとテーマにしてきてるようですが、気候変動とどう関わり合っていて、それをどう見てますか？

●暦がずれてきてるみたいな話しもあるんだけど、ずれてるかどうかはよっぽど暦を使わないとわからないはずなんです。たとえば梅雨時期がこれだけずれたとか、この季節の平均気温が変わって来てるとか、それによって発芽の時期がこれだけ変わって来てるとか、むしろ暦という物差しをあてないとわからない。

僕はやっぱり二十四節季と朔弦望（さくげんぼう＝月の満ち欠け）というのは見続ける。その物差しを当ててみて、夏の土用の頃には嵐が多いけど、降水量は年々増えてる気がするなーとか、そういうことを見たりはしてます。最近の実感としては、来年は梅干しつくれるのかなーと。土用干しできるのかなと。今年はがっつり梅雨で土用がもっていかれて、梅干しを干せたのは土用のだいぶ終盤で、カビやすいっていう声も聞くし、梅干しを作れるエリアがどんどん変わっていくかもしれないというのはちょっと感じてます。あと味噌の好みも変わるかもなという気がしてます。瀬戸内海とか九州の人は麦味噌が好きで、その特徴は若くて甘いんですけど、そういう趣味趣向、好みは変わっていくかもしれませんね。

自分が具体的に暦を見るとか、あと梅干しを漬けてみて干しにくいなとか、味噌の発酵が思ったより早いなとか、それがセンサーになって気候変動が把握できると思うから、やっぱり手を使う行為が一番気候変動に対応する大事なスタンスだなとは思ってます。

そういう自分でありながら国際会議に関わるというスタンスをこれから作っていくんじゃないかと思います。

●僕は 13 の月の暦と 24 節季、朔弦望の太陽太陰暦とあと地球暦を使ってます。

だいたいものの見方が一つというのは、僕は自分にとって危ないなと。センチ、メートルで計ってる文化とインチで計ってる文化と尺とか寸で計ってる文化とは、文化、思想、ライフスタイルが違うんです。だから物差しが画一化するということは、多様性が失われる。非常に支配的な社会になるんだと思います。今はグレゴリウス 13 世というローマ法王が作ったカレンダーを、あらゆる宗教を超えて使ってるわけでしょ。でもそこにはキリスト教的価値観が明確に入ってるから、ある意味使わされてるという歯がゆい気持ちの人だっていると思います。

グローバルなものをもつことの良さはあるから否定はしませんけど、ただ僕自身のメンタリティーとか世界観のためには、いくつかの物差しを当てる。2, 3 ヶ使うというのは僕にとってはぜんぜん苦じゃないんです。それぞれ得られるものがあるし。

特に、風土記的なものとか風習、伝承というものが土地土地にありますよね。僕はあくまでもこの日本列島の歴史に根ざして生きてるので、日本の暦が読めないと理解できないものがいっぱいあるんですよ。なんでこの時期にこれをしてたんだろみたいなね。夏越の祓（なごしのはらえ）もそうだし、七夕も近いし、なんで大晦日に除夜の鐘をつくのかとかも、旧暦＝当時の暦を理解してないとさっぱり何なのかわからないみたいなことがある。僕はこれまでの文化にもライフスタイルにも興味があるし、これからどう生きていけばいいかのヒントは、間違いなくずっと続いてきたものの中にあると思ってる。七草がゆの話しもそうだし、暑中見舞い、残暑見舞いもそうだし、日本の暦という物差しをあてることで、なるほどーとなってくる。ネオ・ネイティブ・ジャパニーズとしては必須かなと。

コロナの意味

●ウイルスは変容をうながす。環境に不具合を感じた時に現れたりするもの。変容の象徴というかんじがしています。感染するしないは置いといて、ほんとうに社会システムとか僕らの免疫システムとか、関係性のあり方とか仕事のありかたとか、コミュニケーションのあり方を見直していかないと、また次のコロナが来るだろうな。別の名前の何かが。それはウイルスじゃないかもしれないけど。とにかく生態系が起こしてることは、調整、調整、調整。変化が必要なところに変化を起こすっていうことだと思うから。まあぶっちゃけこれは人為的に誰かがばらまいたのかもしれないなと思ってるんですけど、そうじゃないかもしれない。それはフィフティフィフティで、僕はどっちも信じてる。やりかねないし、自然発生かもしれない。

ここは大事なポイントですけど、どっちかを信じ込もうとする人が多い気がする。人為的だーっていう人は絶対そうだと言うし、人為的じゃないと思ってる人は絶対そうじゃないと。でもどっちもあり得ると思っといた方が、僕にとってはしっくりくる。それにどっちだとしても自然だと思います。だって僕らは自然の一部なんだから。大きく見るといろんなことを見直していくことが大切で、それはある意味禅的であるし。禅的というのは意識的である、今ここを生きる、今自分は何に違和感を感じているか、今自分がしっくりきているのは何か、今手放すものは何か、というものを見つめていくことでもあると思う。ある意味での禅問答が大切だし、呼吸とつながる、自分の心とつながる、自分の身体とつながる、違和感や本音とつながることも大事だし、本音が表現しにくい世の中だったということに気づいてしまったとしたら、その嘆きとか絶望とつながることもすごく大事だし。

僕自身もそうだし実際いろんなところでみんな心の中に刺激を受けてると思う。絶望、諦め、むかつき、いらいら、途方もなさ。でもそれって非暴力コミュニケーションの世界の中では、自分が生きる上で大事にしたいものにつながる糸口なんですね。そういう感情は。だから感情を起こした誰かのせいにするんではなくて、社会のせいだ、コロナのせいだじゃなくて、自分はこんなに人がもめることに心を動かされるんだな、こんなにトップダウンで振り回されることについて心が動くんだな。てことは、私はトップダウンだけじゃない、みんなで話し合って決めれるような世界を望むんでいるんだなと。自分は誰かが本音を言っても、それが少数派でもバッシングされないような世界を望んでいるんだなと。嘆いているのは私であって、むしゃくしゃするのも自分であって、うれしく思うことも自分の中で起きてることだから、そこをちゃんと受け止めていくためには時間がかかると思う。その先に何が出てくるかは、歩いてみないと一歩

14 頁につづく